



五家荘は久連子、椎原、仁田尾、葉木、樺木の五地区からなる。九州山地と川辺川の分水嶺に囲まれた水源地域である。原生林の残る一帯はまさに平家落人伝説を偲はせる秘境である。

山の稜線が十二単衣ひもとのように折り重なって迫ってくる。ハンドルを右に左に。北はどの方角だろう。山道では行き合う車もない。人恋しくなりかけた頃、やっと人家が一軒。人目を忍んで生きてきたという平家の里伝説をしみじみと実感させられる。

その人目を忍ぶ山里が、自己主張をする時がある。冷え込んだ朝、昨日まで何事もなかった山が突然、赤や黄に色づく。もみじの色の違いは、それぞれの

葉の中の酵素とその土地の気温や湿度、その日の紫外線という三つの条件が複雑に作用し合って起こる。五家荘の紅葉はその日の五家荘だけでは見られない。

紅葉は寒冷地、つまり山の高いところから順に始まる。まず椎葉越、そして二本杉峠、樺木・・・紅葉が美しいのはほんの一週間。あちらこちらの山が大急ぎで衣替えしていく様はとても華やか。そして、里も秋まつりで賑わう。

色づくカエデやブナのような広葉樹は自然に大きくなるが、伐採できるまでには時間がかかり、商品価値が低い。せつかな人間は、成長が早くてお金になる針葉樹を植えたがる。年中青々とした杉が行儀よく立っている山が増えていく中で、ここだけは思い思いに色をつけた木々が無造作に伸び伸びと枝を張っている。

迷路のように曲がりくねった道をたどった果てに見た一枚の色鮮やかな画布。

流れが違う。風が、空気が、時間が、そして人の生き様が・・・深閑とした森が眼前にあった。

撮影／宮井収次

天然色の画布